特別講演②「HPV ワクチンを全ての科の先生に知って欲しい！」
日本臨床内科医会公益事業委員・学術部感染症班
福井県済生会病院産婦人科主任部長　黒川　哲司　先生

本講演会では、子宮頸がんと HPV（ヒトパピローマウイルス）ワクチンについて、医療従事者が患者や家族に適切な情報提供を行う重要性が語られた。黒川先生は、子宮頸がんは HPV 感染が主な原因であり、ワクチン接種と検診によって予防できる可能性が高い病気であるにもかかわらず、日本では接種率の低下によって予防の機会を逃した世代が生じていることを説明した。また、子宮頸がんは若い世代にも発症し、治療では手術や放射線治療、抗がん剤治療など患者に大きな身体的・精神的負担がかかることから、「知っていれば防げた」という状況を減らすことが大切だと強調された。

講演では、HPV ワクチンの有効性や安全性、2 価・4 価・9 価ワクチンの違い、キャッチアップ接種の意義などについて解説が行われた。特に、ワクチン接種を勧める際には利益だけでなく副反応や有害事象についても丁寧に説明し、本人や家族が十分に理解したうえで判断できる環境を整えることが重要であると述べられた。実際の患者や家族との関わりを通じて、医師が時間をかけて説明することで接種への理解が深まり、家族の健康を守ることにもつながるという経験が紹介された。

講演の終盤では、ワクチンを接種するかどうかは最終的に個人の選択であるものの、医療者には正確な情報を提供し、家族で話し合う機会を支援する役割があると訴えられた。さらに質疑応答では、既に 2 価または 4 価ワクチンを接種した人への 9 価ワクチンの位置づけや、男性への HPV ワクチン接種の考え方などについて意見が交わされ、HPV 関連疾患の予防という観点から幅広い啓発の必要性が示された。全体を通して、子宮頸がんの予防にはワクチン接種と検診の両方が重要であり、そのためには医療従事者による継続的で丁寧な情報提供が不可欠であるというメッセージが語られていた。

（こしの医院　越野　雄祐）